

## トラック 7-1

昔々、男と女がいた。彼らは子供を儲けた。しかし、母親の方は子供を産む前から宗教に関わることがとても好きだった。彼女は結婚する前から、ムザザ・ムリディニ（抹香夫人）と渾名されていた。

時は経ち、彼女は読むことを学ばないものの、宗教に関することはずっと好きだった。そして、ジンたちが彼女の信仰を深めることを助けることもたまにある。ということで彼女は祈ることを学んだ。男の方は、それほど敬虔ではなかったが、奥地の男で、身体が強く、頑丈だった。こうやって彼らは生活し、子供が生まれた。それは男の子で彼らの最初の男の子だった。女は宗教に関わることが好きだったが、学んだことも読むことも習わず、先生たちのところに通った。彼女はとにかく宗教が好きだった。先生たちや、聖者や学者のところを訪れる度に、彼女は子供を連れて行った。彼女は子供を3人産んだが、彼女は、足しげく通うところに子供をみんな連れて行き、彼女の子供はひとりずつ先生に紹介された。

或る日、一番上の子がコーラン学校に通い始めた。しかし、彼はコーラン学校に留まっていなかった。書字板が与えられると、彼はそれを先生に投げ、行ってしまった。彼はとうとう旅に遣られることになり、とても遠いところに旅にやられた。家族や母親からこれほど遠く離れても、彼にはどういう理由で母親がこういう仕打ちをしたのかわからなかった。彼は相変わらず勉強することはなく、ただ家に帰ることを望んでいた。何年も経って、彼はついに逃げ出して家に戻った。

このようになったが、彼は結局は自分の家でも放って置かれた。彼がいた異国でも、彼は勉強せず、その後自分の町に戻ってからも、同じことが繰り返された。学校では彼は何も理解できず、相変わらず学校をさぼっていた。

ブレラの物語のように、学校をさぼっていた子供は或る日池の前に来たが、そこで、底の水を昇らせるに使う綱を見つけた。そこで彼は思った「自分は、この徴のように、水面まで昇らせることが出来ないほどまでに重いだろうか」。彼はそのことにこだわり、学校に戻った。そして、少しずつ理解し始めた。彼はとうとう自分の村のモスクに入ったが、宗教についての物事は全然わからなかった。彼はそこに行って、訳のわからないお祈りの言葉を聞いたただけだったが、何もわからなかった。彼は、2つ目のモスク、次いで3つ目にも行ったが同じことだった。彼はついに、ひとりの人と親しくなり、その人はどこにでも彼と一緒にいった。しかし、彼と一緒に近くのモスクを巡った友人も同様に何もわからなかった。彼らはやっと、大人にも教えているモスクを見つけた。そのモスクにいた先生は、そこにいたすべての人が理解できるように説明した。この時から、彼らはアラビア語を理解し始めた。彼らは最後には、このマドラサの優等生になり、勉強できるものすべてに手を出した。

相変わらず聖者たちのところを訪れていた母親は、息子を放っておけず、いつも近くにいることを望んだ。彼は自分のヴァラ（独身小屋）を建てる権利も無く、彼女は寝るときでさえ、彼が自分の近くにいることを望んだ。

その子は、母親と距離を置いて、何か価値のある、野心的なことをやろうとする度に、誰かが邪魔をするという不運に見舞われた。しかし、母親はようやく彼を異国に遣ることを受け入れた。

子供が新しい学校に入って2年後に母親は亡くなった。そうになると、誰がその後この遠くに遣られた子供の面倒を見ることになるのだろうか。実際、それはコモロからマダガスカルに行くようなことだった。

彼はこの不幸や困難に立ち向かい、ついに神は、必要なものを得る方法を見出すことを彼に許す道を開かれた。このことは、いかなる人も、生涯を通じて不幸に見舞われたとしても、乗り越えることが出来ることを示している。